多文化主義への闘い：Ishmael Reed, *Japanese by Spring*

高階　悟

Ⅰ．アメリカの多文化主義

多文化主義（multiculturalism）は、アメリカでは1980年代後半より教育の場を中心に発達し、政治・経済・文化などさまざまな分野で議論されている。今までのヨーロッパ中心の歴史観や価値観の見直しから生まれた多文化主義は、社会の主流からかつて排除された人種・民族、宗教集団、女性、障害者、同性愛者などを尊重し、理解しようとする考え方である。しかしながら、多文化主義が政府の政策や教育内容などに大きな影響を及ぼすようになり、エスニック集団が発言力や政治力をつけるにつれて反発する意見が出てきた。多文化主義への保守派の学者や伝統主義者からの最初の砲撃は、アラン・ブルーム（Allan Bloom）の『アメリカン・マインドの終焉』（*The Closing of the American Mind*, 1987）と言われている。(1) 1990年代より保守的政治家や大学教育関係者がメディアと共に、多文化多民族国家を目指す多文化主義が従来の西欧文化中心のアメリカの伝統を脅かし、「統一国家としてのアメリカの分裂」(2) の危機に陥らせていると反撃を開始した。この二つの思想の対立が、西欧文化と非西欧文化の衝突やアメリカ社会を支配する集団の歴史観と迫害された経験を持つ少数派（マイノリティ）の歴史観の衝突による「文化戦争」（Culture Wars）と呼ばれる状態を引き起こしている。

「文化戦争」に発展した多文化主義を巡る論争は、反積極的差別是正措置（アファーマティブアクション）運動、反政治的妥当性（ポリティカル・コレクトネス）運動、反バイリンガル言語教育運動、英語公用語運動としてメディアに取り上げられる機会が多くなってきている。このような白人保守派の考え方に反応して、日本でも「多文化主義はもう流行遅れである」、「多文化主義は学生には人気がない」と言う大学教育関係者が増加している。しかし、現在アメリカは106のエスニック集団 (3) がいる多民族国家であり、多文化主義は国家の未来を決定する重要なイデオロギーの一つである。多様な人種・民族との共存への道は、アメリカ社会のみならず、世界的な課題である。

アメリカ文学の中には多文化主義を題材とした小説や演劇が数多くあるが、アフリカ系アメリカ人作家イシュメール・リード（Ishmael Reed, 1938-）の小説『春までに日本語』（*Japanese by Spring*, 1993）を手がかりにして多文化主義を巡る大学のキャンパスを舞台とする論争の様子を覗いてみたい。同時に、さまざまな人種・民族の共存を目指すアメリカの多文化主義の本質と課題に迫ってみたい。

Ⅱ．西欧文明と非西欧文明の衝突

イシュメール・リードは、作家、詩人、劇作家であり、1967年よりカリフォルニアに移り住み、カリフォルニア州立大学バークレー校で文学の講義を続けている。また、1976年には、多文化主義推進団体であり、多様な文化背景を持つ文学作品を広く紹介する「コロンブス以前財団」（Before Columbus Foundation）の創設に参加した社会運動家でもある。彼のモットーは「書くことは、闘うこと」（同名のエッセイ集, *Writin' Is Fightin', 1976*）であり、彼は常に政治的・社会的問題をテーマに意欲的に創作活動を続けている黒人作家であり、ファイターでもある。イシ

ュメール・リードの代表作は、日本語訳も出版されている第3作目の小説『マンボ・ジャンボ』(*Mumbo Jumbo,* 1972) である。この難解な小説は、西欧文明への徹底した攻撃とアフリカの多神教のヴードゥー教を扱った実験的な小説であり、まさに「書くことは闘うことである」と思わせる人間社会の深層部を扱った作品である。彼は執筆活動を通じてアフリカ系アメリカ人の文化のために一貫して闘っている。

イシュメール・リードの第9作目の小説『春までに日本語』は、ある時代の表層的なイデオロギーの対立を扱っており傑作とは呼べないかもしれない。しかし、1980年代以降の政治的・社会的問題と「文化戦争」を風刺的に扱った面白く、時事性の強い作品である。この小説には、時々日本語とアフリカのヨルバ語が出てくるためにアメリカ人には扱いにくい作品のようである。イシュメール・リードがヨルバ語を用いた理由は、ヨルバ語がアフリカ系アメリカ人の祖先の言語であるからであり、日本語を用いた理由は日本語がアメリカに次ぐ世界第二位の経済大国の言語であるからである。1980年代後半には日本企業がアメリカに進出し、ニューヨークのロックフェラーセンター（アメリカの象徴）やプロ野球球団を買収し、日本人がアメリカ人を脅かす存在になったからである。日本語とヨルバ語の共通点は、西欧文明に対抗できる非西欧文明の言語であることである。

イシュメール・リードは1996年6月に来日し、雑誌のインタビューで「日本人は日露戦争で初めて白人国家を打ち破ったために、アメリカのマイノリティによって賞賛されている」(4) と日本への深い関心を示している。また、リードは1989年より日本語を学んでおり、小説『春までに日本語』には日本のさまざまな歴史、文化や思想が描かれている。日本に関係する事柄として広島・長崎への原爆、仏教、アイヌ民族、沖縄、在日朝鮮人、慰安婦問題、大東亜戦争、真珠湾攻撃、黒竜会（右翼）、ヤクザなどがあり、さらに人物として坂上田村麻呂、近松門左衛門、芭蕉、山本五十六、東条英機、中曽根康弘、石原慎太郎、三島由紀夫、永井荷風などが出てくる。この小説では、大学のキャンパスと言う巨大な闘技場でアフリカ文化、日本文化、ヨーロッパ文化が入り交じって大乱戦（バトルロイヤル）を繰り広げている。イシュメール・リードは日本文化を取り入れることによってヨーロッパ中心の価値観に対する闘いの戦場を拡大し、同時に日本人がヨーロッパ人と同じ過ち（他民族や国家への侵略と人種差別を正当化する言動）を犯しかけていることに対して警告を発している (5)

Ⅲ. 多文化主義をめぐる闘い

小説『春までに日本語』のエピローグのサブタイトルは、「オロデュマレが回復したか」(Olodumare regained?) である。オロデュマレは、多数の神々を信仰するヨルバの伝統的宗教の中で創造主にあたる最高の神である。(6) 作者のイシュメール・リードがエピローグに登場し、共同体の内部で反対者を排除する日本の単一文化的体質を批判し、ヨルバの多神教の神オロデュマレにアメリカの若者が直面しているトラブルを解決する手掛かりを求めている。イシュメール・リードはキリスト教やイスラム教のような一神教ではなく、多神教のオロデュマレに現代の複雑な問題の解決を委ねているようである。この小説はエピローグの次の一文で終わる。

Just then a beautiful black butterfly with yellow spots collided with his chin and flew away.

「ちょうどその時、一匹の美しい黄色い斑点のある黒い蝶が、彼（イシュメール・リード）の顎にあたり、そして飛び立って行った」(7)

蝶が飛び立ってゆく有様は、明るい未来を暗示している。この英文中の“black”が意味するのは文字通りアフリカ系アメリカ人であり、“butterfly”は移り気な人を象徴しており、“yellow”に象徴されるのは日本である。黄色い斑点のある黒い蝶とは、『春までに日本語』の黒人主人公を表している。黒人主人公が左（ブラック・パンサー）や右（新保守主義）とあちこちを飛び回り、作者イシュメール・リードと出会い、そして彼方に飛び立ってゆく様子を最後の一行が表している。

それでは、蝶のように飛び回る黒人主人公、ジャック・ロンドン大学の黒人講師ベンジャミン・「チャッピー」・パットバット（Benjamin“Chappie”Puttbutt）について見てみよう。「名は体を表す」という言葉があるように、黒人講師のチャッピーという子供っぽい響きのミドルネームとパットバットという軽薄な感じのファミリーネームは、主人公の風見鶏的な移り気な人間性を表している。イシュメール・リードは、主人公のチャッピーを“Afro-American intellectual”ではなくて“new black intellectural”[8]として描いている。“new black intellectual”とは、黒人には認められずに白人に評価される知識人で、抑圧や人種差別に関心を持たない知識人である。黒人講師は、大学では黒人の同僚に“Uncle Ben”（p.10）と見なされ、仲間外れにされていた。“Uncle Ben”とは今日でもアメリカのスーパーで販売されているテキサス産のライス・プディングの登録商標（トレードマーク）であり、白人に従順な黒人を表すネガティブな黒人のステレオタイプの一つである。ジャック・ロンドン大学の人種構成は白人学生が48％、アジア系学生が30％、黒人学生が８％であり、白人優位主義の大学である。学生は先生に対しては“Professor～”または“Mr.～”と呼んでいるが、黒人講師に対しては「チャッピー」と名前で呼び捨てにした（p.12）。黒人への人種差別と人種的偏見が幅をきかせているジャック・ロンドン大学内では、白人が黒人男性を名前で呼び捨てにする奴隷制時代のアメリカの古い慣習が依然として残っていた。

黒人講師チャッピーは60年代には空軍に入隊し、ブラック・パンサーに影響されて空軍内でブラック・パンサーの活動をしたが、現在（1990年）では終身在職権（テニュア）を手に入れ、高級住宅街に住む夢を実現させるためにあらゆる学内派閥の思想や権力に調子を合わせる「平和主義者」になりきっていた。彼が他の教員と異なることは、日本人のドクター・大和より『春までの日本語』（*Japanese by Spring*）のテキストを使って日本語を習っていることだった。

黒人講師チャッピーの大学における彼の言動を多文化主義を背景に辿ってみたい。ジャック・ロンドン大学では、人事問題やカリキュラム編成に関係して教員同士の意見対立、組織内の敵対者に対する嫌がらせと排斥運動、策略と裏切り、権力へのへつらいなどが起こる。小説『春までに日本語』では、それらの争いが多文化主義を巡る文化や思想の代理戦争として風刺的に描かれている。黒人講師がキャンパスの中で終身在職権（テニュア）獲得競争や教員同士の権力獲得競争の過程で直面する次の４つの問題：積極的差別是正措置（affirmative action）、政治的に正しい言語運動（political correctness）、フェミニズム、西欧伝統主義（traditionalism）、についての彼の葛藤を個々に見てみたい。

①差別是正措置とカリフォルニア州の動向について。積極的差別是正措置政策は、黒人、アメリカ・インディアン、イヌイット、アジア系、ヒスパニック、及び女性への過去の差別に対する償い[9]として大学の入学や政府機関などへの雇用において優遇するという画期的な政策であったが、一部の白人は逆差別と反発した。ジャック・ロンドン大学のあるカリフォルニア州では逆差別裁判が起こり、1980年代より積極的差別是正措置の撤廃を求める白人の声が強くなり、大学入学選抜の際の黒人やヒスパニックへの優遇措置は次第に後退していった。（1996年、カリフォ

ルニア州は住民投票によって黒人など人種的少数派や女性への優遇措置を撤廃する州法修正案が可決した。）黒人講師チャッピー はこのような風潮に敏感に反応して、差別是正措置に反対する論文を雑誌に発表し、日本人と中国人の区別がつかない白人のスツール学長の機嫌をとるのである。スツール学長は、黒人講師チャッピーを差別是正措置で採用した最高の教師と喜んでおり(p.43)、黒人講師は学長の期待に添う言動をしていた。また、スツール学長は、多文化主義の時代に黒人研究の熱狂を鎮めるために黒人のチャールズ・オビを「学園の火消し役」(academic fireman）として黒人研究所の所長に採用した（p.30)。チャッピーは白人の記者にキャンパスで白人学生が黒人学生を襲撃した事件についてコメントを求められて次のように答える。「それらの黒人学生達は、白人の罪悪意識をもてあそぶような知的に下品な慣習を止めるべきである」(p.7）と。彼はこのような白人寄りの発言をすることにより、大学で終身在職権を獲得しようとしていた。

イシュメール・リードは積極的差別是正措置政策が白人支配を維持するために白人に迎合しやすい黒人を採用するために利用されている面を描いている。既成の体制に骨抜きにされた差別是正措置があり、白人に同化することで上昇志向を目指す黒人中流階級の人々がいる。黒人講師チャッピーは自分の目先の利益を追求し、人種差別問題に無関心な、闘わない知識人として描かれている。イシュメール・リードは、差別是正措置を導入する1960年代に広く認識された考え方つまり、「人種差別問題は白人の意識の問題である」[10] という前提そのものを自分の利益のために覆す中流階級の欺瞞的な知識人を描いている。

最近のニュースによれば、カリフォルニア州立大学はキャンパスにおける多様な学生を受け入れるために差別是正措置の禁止決定を2001年の５月１５日の評議会で撤回した。カリフォルニア州立大学側の意識変革によって、少数派（マイノリティ）の学生を積極的に合格させる多文化主義的政策が復活した。その要因は、2000年の国勢調査の結果、カリフォルニア州では白人が過半数を割り、ヒスパニック系が３分の１を占めるようになったが、ヒスパニック系の大学入学者が激減しているためであった[11]。アメリカの人口構成の変化に伴う教育界の対応が注目される。

②差別的な言動を慎もうという政治的妥当性（ポリティカル・コレクトネス）対言論の自由について。ジャック・ロンドン大学の学生新聞「クーンズ＆カイクス」(*Koons and Kikes*）は、黒人講師チャッピーがダチョウ（現実逃避主義者を意味する）と交尾をしている漫画を掲載した。学生新聞「クーンズ＆カイクス」のクーンズ（coons）は黒人への蔑称で、カイクス（kikes）はユダヤ人への蔑称である。新聞の名前そのものが人種的偏見と差別に満ちており、政治的に妥当ではない。が、学生新聞は言論の自由を盾に「ホロコーストはなかった」と全面広告を出すことも可能であった（p.65)。チャッピーを馬鹿にした漫画を載せた白人編集長ベイスは、今までにチャッピーの自動車に「KKK」と落書きをしたり、死の脅迫状を送りつけたりしていた（p.56)。

この漫画事件を契機にキャンパス内では、編集長ベイスを支持する言論の自由派と差別的言動を批判する（PC）派の間で学生新聞「クーンズ＆カイクス」についての論争が起こった。憲法修正第一条を盾に言論の自由を主張する白人のフラタニティ（男子学生社交クラブ）は、「ポリティカル・コレクトネス運動はキャンパスにおける新しいマッカーシズムだ」(p.65）とPC派を攻撃した。当事者のチャッピーは、終身在職権（テニュア）を獲得すること以外の事には全く関心を示さなかったが、他の黒人の教員や学生は、編集長ベイスが大学の有力な資金援助者の息子であろうとも懲らしめるべきだと思っていた。ボブ・ディランを愛する60年代のリベラリストの人文学部長ロバート・ハートは、副学長の反対を押し切って学生新聞の白人編集長ベイスを停学処分にした

『春までに日本語』の中でのポリティカル・コレクトネスを巡る議論は、1980年代以降の人種差別的な言動を是正しようとする多文化主義者と言論の自由を主張する新保守主義者の対立を反映している。イシュメール・リードは両者の争いを冷めた眼でみているが、「言葉狩り」云々の議論の前に、黒人は無知な一部の白人の差別的言動をどこまで耐え続けなければならないのかを、読者に問いかけているようである。言葉は行為であり、人が用いる言語は、個人的な精神状態を表すだけでなく、社会的な価値の確認でもある。(12)

③フェミニズムと人種差別について。黒人講師チャッピーは、終身在職権を獲得するために大学で勢力を伸ばし始めているフェミニストに迎合した論文を発表した。女性学の主任マーシャ・マークスは、白人フェミニストの立場からチャッピーの論文の一節「奴隷制の時代、黒人男性は奴隷所有者が奴隷を扱う以上にひどく黒人女性を扱った」(p.58)(13)を引き合いに出して彼の勇気ある主張を誉めたたえる。チャッピーは「奴隷制の批判は止めるべきだ」、「私はフェミニストの理論無くして研究してゆくことができない」などと女性学の白人主任に胡麻をすり、終身在職権の獲得に一歩近づいたと確信する。しかし、黒人フェミニストのエィプリールの出現で彼の地位が危うくなり、教授会の最終投票では負けてしまう。女性学の主任マーシャは、人種差別主義(racism)と性差別主義 (sexism)、それに同性愛嫌い (homophobia)と闘うには同じレズビアンの黒人女性フェミニストのほうが良いと判断したのであった。チャッピーは白人フェミニストに裏切られ、自分が「頭脳を使う雑役夫」(intellectual houseboy, p.69)であったことに気づき、ブラック・パンサーに熱中していた時以来の怒りを20年ぶりに感じるのである。

イシュメール・リードは黒人講師チャッピーとは異なり、フェミニストに反対する女性嫌い(misogyny)として有名である。彼は女性嫌いの男性を描がく黒人女性作家を黒人の裏切り者と呼ぶ「首謀者」とも言われている(p.24)。イシュメール・リードがフェミニストを批判している点は、一部の黒人男性の犯した性的犯罪を、大多数の、あるいはすべての黒人男性のもののように誇張して描いていることである。(14) イシュメール・リードは、小説の中では黒人フェミニストや彼女らを支持する知識人の偽善性を描いている。黒人講師チャッピーの代わりに専任教授に採用される黒人フェミニストのエィプリールは、ゲットーにおける下層階級の女性の抑圧、エコロジー、動物の権利などを研究している。しかし、彼女はジャック・ロンドン大学に赴任するにあたって、コンピューター機器、二人の秘書、ボディーガードそして丘の上の住宅を要求したのである(p.32)。エィプリールは「黒人の下層階級の女性の抑圧」を研究テーマにしながら、白人の上層階級の暮らしを目指していた。イシュメール・リードは、黒人フェミニストのエィプリールを「主義主張で売春のように金儲けをする人」(cause pimp)の一人として描いている。

黒人フェミニズムの研究者の英語学科主任ミッチは、アニタ・ヒルのTシャツを着て歩く白人教授であった。彼は学内ではセクシャル・ハラスメントの問題を取り上げて、女性の味方として知られていたが、家庭ではまったく反対のことをしていた。ミッチ教授は彼の妻と子供を10年間も犬小屋のような汚い地下室に監禁していた事実が明るみ出て、オークランド警察に逮捕される。ジェンダーの関係で矛盾のない登場人物はこの小説にはいない。黒人講師チャッピーは、空軍時代の日本語の先生の妻と関係を持ち、寝取られた日本語教師を切腹自殺に追いやる(p.173)。イシュメール・リードは、時代の流行に乗ってフェミニズムを標榜する知識人の研究生活と現実生活の大きな矛盾を皮肉を込めて描いている。

イシュメール・リードは、黒人男性の立場からフェミニズムと闘っている作家として知られているが、彼が執筆活動の中で主張しているのは次の2点である。一つは、フェミニズムは白人の

中流階級女性中心の運動であり、一部の黒人女性作家をうまく利用している面があること、二つ目は、フェミニストは黒人男性を抑圧者として叩くことで世間の注目を浴びているが、その黒人男性描写には問題があることである。[15] リードは「一部のフェミニストは、つねに人種差別的な態度で黒人男性を批判している」[16] とさえ述べている。フェミニズムの目的は、女性の解放のために女性差別を無くす運動であり、人種差別を無くすための運動であるが、時には二つの運動が両立しない時がある。19世紀の女性解放運動（フェミニズム）は、自由と平等を求める奴隷制廃止運動に女性が参加した白人女性が中心なって誕生したが、[17] 19世紀後半の参政権獲得運動の問題が現実のものとなった時、黒人は人種優先かジェンダー優先かの二者択一を迫られた。この対立から派生して20世紀後半には多文化主義とフェミニズムの論争が時々話題になっている。

④西欧伝統主義（traditionalism）と単一文化主義について。黒人講師チャッピーは、終身在職権（テニュア）を獲得するために大学の中では何事にも人の言いなりになっていたが、それでも彼の昇格に公然と反対する白人の教授がいた。西欧伝統主義のリーダーである英文科のクラブツリー教授である。彼は人種的偏見を露わにし、チャッピーがキャンパスで挨拶をしても無言で睨みつけるだけだった（p.21）。ミルトン学者のクラブツリー教授は、15年間も論文を発表せず、学生には人気がなかったが、学内政治では大きな影響力を持っていた。ミルトン学閥は、学内政治の主導権をめぐり脱構造主義者、フェミニスト、多文化主義者と対決しており、黒人講師チャッピーの昇格の時には、彼がブラック・パンサーに夢中だったころの論文「シェークスピアの『オセロ』が人種差別的だ」を批判してチャッピーの終身在職権（テニュア）に反対した（p.94）。西洋中心主義者のクラブツリー教授は、「黒人は、難しいヨーロッパ中心のカリキュラムについてゆけないために多文化主義教育を要望している」（p.111）と多文化主義を批判する。

しかし、ジャック・ロンドン大学が日本人に買収され、チャッピーの日本語教師ドクター・大和が学長に就任してからは学内の西欧伝統主義と多文化主義の力関係が逆転する。黒人講師チャッピーは白人の上司、フェミニスト、黒人研究所所長などの裏切りに失望し、引き出しからマルコムXの写真を取りだして闘う黒人に変身した。彼は学長代理に任命され、人事異動や大胆なカリキュラム改革に乗り出す。黒人フェミニストのエィプリールはニューヨークに追い返し、英文学科のクラブツリー教授にはアフリカの言語であるヨルバ語を教えるように命じる仕返し人事を断行する。大和学長は、ヨーロッパ文明中心の人文学部を廃止して、英文学や女性学研究をヨーロッパ研究学科に格下げし、すべての教職員に日本語の学習を要求し（p.99）、日本文化を学ぶための新しい学科を「普遍性研究学科」（Department of Universal Studies）と名付ける。

大和学長は、次第に日本愛国主義者（Japanese chauvinist, p.154）の本性を現してゆき、ジャック・ロンドン大学を日本のA級戦犯の名前にちなんで「東条英機大学」に変更し、学生会館を真珠湾攻撃の時の連合艦隊司令官の名を取って「イソロク・ヤマモト・ホール」に改名するのである。チャッピーは、黒竜会に所属する大和学長の「民主主義を廃止して、徳川時代のような将軍支配の復活を目指す」（p.175）ような侵略政策に抵抗し、アメリカ人として新たな闘いに乗り出す。チャッピーは、「黒い牙」（black fang, p.180）と呼ばれるようになり、ヨーロッパ文化を排除して単一文化主義的な徳川時代を目指す日本の右翼と闘い、ジャック・ロンドン大学をアメリカ人の手に取り戻す。

小説『春までに日本語』では、キャンパスにおける西欧伝統主義と多文化主義との対立が、右翼的な日本人が介入することにより、多文化主義と単一文化主義（monoculturalism）、多文化主

義と言語帝国主義（linguistic imperialism）の対立に変わってゆく。イシュメール・リードは、アメリカの白人であれ、日本人であれ「自分の伝統や基準が普遍（universal）だ」（p.155）と主張する民族中心主義的な単一文化主義の持つ帝国主義的傾向を風刺的に描いている。ヨーロッパ諸国はかつて世界制覇を目指して政治、経済、文化、宗教などにおける一元的な価値を他国や他民族に押しつけ、少数民族や異邦人を侵略し、絶滅の危機に追いやった歴史がある。イシュメール・リードが目指す社会は、他民族や外国語を排除する単一文化主義ではなく多様な民族・多様な言語が共存することができる多文化主義である。彼はアフリカ系アメリカ人の文化を尊重しながらも、「ブラック・ナショナリズムは、単一文化主義的である」[18] と述べている。彼が理想として目指しているのは、民族主義的なセパレイトな「多**分化**主義」[19] に陥ることのない共存の多**文化**主義である。イシュメール・リードはアフリカ文化、アジア文化、ヨーロッパ文化などの大乱戦（バトルロイヤル）ではなく、また単一文化主義でもなく、多文化主義的観点から「共通な文化の定義」が可能だと述べている。

> I think that a new definition of common culture is possible, and that because of their multicultural status, Latinos, African Americans, and Asian Americans with knowledge of their own ethnic histories and cultures as well as those of European cultures are able to contribute to the formation of a new, inclusive definition. [20]

Ⅳ. 坂上田村麻呂と蝦夷（エミシ）の指導者 阿弓流為（アテルイ）

最後に小説『春までに日本語』の中のドクター・大和と古代東北の坂上田村麻呂（758-811）、チャッピーの関係について触れてみたい。戦士の血を引くチャッピーの祖父は次のように描かれている。

> They believed that your grandfather was the reincarnation of Sakanouye Tamuro, the African who defeated the Ainu, a tribe located in the Japanese north.（p.177）

日本に関する記述や日本人の名前の表記が正確ではないが、チャッピーの祖父と蝦夷征伐をした坂上田村麻呂との関係が明らかにされている。最初の征夷大将軍に任命された坂上田村麻呂は帰化人の子孫と言われており、また坂上田村麻呂を「偉大な日本の黒人将軍」（the Great Black Japanese Shogun）[21] と記述している論文もある。従って、退役軍人であるチャッピーの祖父が坂上田村麻呂の生まれ変わりであるという話は、イシュメール・リードが作り上げた全くの作り話ではない。『春までに日本語』の物語は、坂上田村麻呂にゆかりのある黒人講師チャッピーが、ドクター・大和（大和朝廷）の命に従い坂上田村麻呂が蝦夷征伐に出たようにアメリカ征伐の手先として利用されたとも読みとれる。アメリカに進出したドクター・大和の策略は、アイヌ民族の血を引く蝦夷の征服と領地拡大を目論んだ大和朝廷、中国大陸支配のために日露開戦に踏み切った明治政府と同じ侵略主義的政策である。黒人講師チャッピーは、ドクター・大和の言動にアメリカの白人と同じマイノリティに対する人種差別と帝国主義的侵略を正当化するイデオロギーがあることに気づき、ドクター・大和に反抗する。その意味で、黒人講師チャッピーは大和朝廷から派遣された坂上田村麻呂であり、大和朝廷に抵抗した陸奥の英雄 阿弓流為（アテルイ）でもある。

大和朝廷と蝦夷の阿弓流為（アテルイ）の関係は、西部開拓史時代の白人とアメリカ・インディアンの関係

に似ている。なぜ大和朝廷は東北の辺境に住む蝦夷(エミシ)を侵略し、支配しようとしたのだろうか。一説には、陸奥に暮らすアイヌ民族の血を引く蝦夷(エミシ)と大和朝廷の人々は、かつてはのどかに暮らしていたと言われている。しかし、749年に多賀城付近（宮城県）から黄金が出て、[22] それ以降朝廷側が蝦夷に進出し、抗争が始まったと言われている。大和朝廷は黄金獲得と領土拡大のために蝦夷の制圧を企てた。788年に大和朝廷は紀古佐美(キコノサミ)を大使にして５万の兵士を派遣し、２回目は大伴弟麻呂(オオトモノオトマロ)を大使にして10万の大軍を送り込み、陸奥の人々を容赦なく殺害し、村を焼き討ちにして制圧しようとした。しかしながら、蝦夷(エミシ)は自分たちの土地を守るために阿弖流為(アテルイ)を指導者にして団結し、朝廷軍をうち破った。阿弖流為(アテルイ)は、アメリカ史では第７騎兵隊を全滅させたスー族の酋長シッティング・ブル（1835-1900）であろう。797年、坂上田村麻呂が桓武天皇より第三回目の蝦夷征伐の征夷大将軍に任命された。彼は阿弖流為(アテルイ)を少年時代から知っており、敬意を持って[23] 陸奥の胆沢城（岩手県水沢市）に進攻した。

坂上田村麻呂は帝国主義的な武力による強硬手段を取らずに、蝦夷を人間として認めて和睦を申し入れることで陸奥を支配しようとした。坂上田村麻呂は古代東北において大和民族と蝦夷(エミシ)の両民族が共存できる道を探りながら陸奥の平定を試みた武将である。一方的な他民族支配ではなく、両民族の共存を目指した政策は、多文化主義的であり、このために坂上田村麻呂は名将として各地で今日でも奉られている。802年、蝦夷(エミシ)の大将阿弖流為(アテルイ)は降伏し、京都に連行され、処刑された。東北地方では、大和朝廷の侵略に対して抵抗した陸奥の英雄阿弖流為(アテルイ)の生涯が歴史研究書、小説『火怨』そしてミュージカル『アテルイ』[24]、アニメーション映画『アテルイ』[25]、ひとり芝居『アテルイ』とさまざまな形で語り継がれている。

このように歴史上の出来事を侵略された民族や少数派の視点から見直すことは、文学の世界のみならず、教育界でも実践されるべき多文化主義への闘いの一つであろう。

※この論文は岩手県立大学での第40回アメリカ文学全国大会（2001年10月13日）で発表した原稿に加筆したものである。

［注］

（１）John Annette, “The Culture Wars on the American Campus”, *The War of Words: The Political Correctness Debate*, Sarah, Dunant ed., Virago Press, 1994, p. 7

（２）Arther M. Schlesinger, Jr., *Disuniting of America: Reflections on a Multicultural Society*, Norton & Company, 1993, pp.16-17.

（３）示村陽一　『異文化社会アメリカ』（研究者、1999）p. 2

（４）“The Writer as Pioneer”, *The Rising Sun, November*, Kenkyusha, 1996, p.37. 富国強兵政策を取っていた明治政府の日露戦争勝利が、有色人種が白人国家を打ち破った例として取り上げられるが、当時ロシア国内では各地で労働者や農民の暴動が起こり日本と戦争を継続するどころではなかったことも事実である。

（５）大塚清恵　「イシュマイル・リード『春までに日本語を』考」（『黒人研究』67号、1997）p.1

（６）文化人類学事典　（弘文堂、1994）p.805

（７）Ishmael Reed, *Japanese by Spring*, Atheneum, 1993, p.225. 以降、本書からの引用は数字で

本文中にその頁数をしるす。

（８）“The Writer as Pioneer”, *The Rising Sun, November,* Kenkyusha, 1996, p.37

（９）明石紀雄・飯野正子　『エスニック・アメリカ』（有斐閣選書、1984） p.302

（10）James Baldwin, *The Fire Next Time*, Penguin Books, 1963, p.27

（11）朝日新聞（夕刊）、６.１, 2000

（12）Deborah Cameron, “Words, Words, Words: the Power of Language”, *The War of the Words: The Political Correctness Debate*, Sarah Dunant ed., Virago Press, 1994, p.26

（13）同様の記述をMichiko KakutaniがToni Morrisonの *Beloved*の論評で述べている。“black men treated black women the same way slave masters treated blacks”, Bruce Dick and Amritjit Singh ed., *Conversations with Ishmael Reed*, Univ. Press of Mississippi, 1995, p.307

（14）イシュメール・リード、松溪裕子訳　『書くこと、それは闘うこと』（中央公論社、1998） p.140

（15）Rebecca Carroll, *Swing Low*, Crown Trade Paperbacks, 1995, p.195

（16）Bruce Dick and Amritjit Singh ed., *Conversations with Ishmael Reed*, Univ. Press of Mississippi, 1995, p.337

（17）渡辺和子編　『アメリカ研究とジェンダー』（世界思想社、1997） p. 8

（18）“A MELUS Interview: Ishmael Reed,1984,” *African American Literary Criticism, 1773 to 2000*, Twayne, 1999, p.238

（19）関根政美　『多文化主義社会の到来』（朝日選書、2000）p.191

（20）Ishmael Reed ed., Multi-America, Viking, 1997, p.xxvii

（21）Michael Hooser, “The Saga of Tamuramaro, the Great Black Japanese Shogun”, *Blacks N' Ashia*, No.2, The Link to Pacific・Rim African・American/African Communities, November 1996, p.24

（22）高橋克彦『火怨：北の耀星』（講談社、1999） p. 6

（23）「蝦夷を導く道は威と徳とを施す」の方針。新野直吉 『田村麻呂と阿弓流為：古代国家と東北』（吉川弘文館、1994） p.196

（24）ミュージカル『アテルイ』わらび座、秋田県田沢湖町、2001年９月より2002年１月まで上演。原作 高橋克彦 『火怨：北の耀星』

（25）岩手県民の会製作のこのアニメは全国上映を開始。秋田魁新報。１.６, 2003

Fighting for Multiculturalism: Ishmael Reed, *Japanese by Spring*

Satoru Takashina

By the mid-1980s, multiculturalism had become the term for the celebration of American cultural diversity and is now controversial in political, sociological and cultural fields, such as affirmative action, political correctness, feminism, bilingual education, the English only movement and so on. This term proclaims freedom and equality to all members of American society, all ethnic and religious groups, women and all others, including such diverse yet forgotten groups as the disabled and homosexuals, who had previously been marginalized.

Multiculturalism provides a historical study of diverse groups living together and an opportunity for employment for racial and ethnic minorities. However, some Americans feel seriously threatened by such tendencies because racial and cultural diversity removed the privileges and opportunities that these white men always enjoyed. Some conservative scholars complain that multiculturalism disregards European civilization and is a threat to the individual rights.

Since the United States began as a multi-ethnic country and there are 106 ethnic groups these days, the development of multiculturalism is inevitable in the future. I would like to examine the problem and the nature of multiculturalism with a novel, *Japanese by Spring* (1993), written by Ishmael Reed (1938-) who is an African American novelist and a professor at University of California at Berkeley.

Japanese by Spring is a parody of the power games of campus politics and ethnic studies on an American campus. Reed is satirizing American society' s tendency to advocate multiculturalism or the importance of all languages and cultures. A leading character in *Japanese by Spring*, a black part-time lecturer, becomes an opportunist to get promoted at Jack London College, which was named after the apostle of Anglo-Saxon superiority. I would like to explore his conflict among the staff in regard to affirmative action, political correctness, feminism, traditionalism on his way to become tenured.

The black lecturer was hired by the ignorant white president through affirmative action because he was a submissive old black man. He tried to adapt his beliefs to the ideological climate at the school and opposed affirmative action catering to the interest of the university superintendents. Ishmael Reed depicts the black protagonist not as an Afro-American intellectual but as a "new black intellectual" who is not concerned about oppression and discrimination. He describes the realities of the mutilated affirmative action policy and the black middle class' aim at success by assimilating into white society.

The black lecturer is the target of attacks by white students. The student newspaper, *Koons and Kikes*, printed a cartoon of the black lecturer having intercourse with an ostrich and a few faculty members demanded political correctness on campus. A white fraternity claimed that the political correct movement was bringing a new campus McCarthyism. Ishmael Reed asks us how much

black people have to endure discriminatory speech and behavior from ignorant white people. The important thing is that "words are deeds and language is not just about representing private mental states, it is also a public affirmation of values."

The black lecturer was in favor of feminism and makes every effort to receive tenure but it is denied. His dream of tenure was rejected by hypocritical feminists and white colleagues who interested in power games and he was replaced by a radical lesbian ecologist/activist. African American Studies department expected her to fight against homophobia, sexism, and racism, but, as soon as she arrived the airport, she demanded a chauffeur-driven limousine and a police escort to bring her to the university. The radical black feminist is depicted as one of the hypocrites in the novel. Ishmael Reed, who is famous for misogyny, often describes white feminists as racists.

Dr. Crabtree, leader of the traditionalists, ignored the black lecturer and fought against his promotion, arguing that the blacks desired multicultural education because they couldn't cut it with the tough Eurocentric curriculum. However, the Japanese took over the Jack London College and their power relation was reversed. The new Japanese president appointed the lecturer as the acting president and he first used drastic educational reforms to settle old scores. Changing the College to Hideki Tojo Daigaku, named after a Japanese war criminal, the new president planned to return the Tokugawa Shougunate to power. The black protagonist handed in his resignation and finally began to fight against the Japanese chauvinists who were monoculturalists with little respect and consideration for other languages and cultures just as Western traditionalists.

The story of *Japanese by Spring* is humorous and has a happy ending in which the multiculturalists won on the college campus. Ishmael Reed seems to give a grave warning to Japanese society that the Japanese should not make the same mistakes as the whites did. Since the Japanese have a long monocultural history that has a habit of oppressing people from other countries and minorities, Japan should adopt the idea of multiculturalism in language education.